

『衣通姫の流』

一語をとりあげて、その語を資料にあたりながら厳密に考察していく方法は、国語学的な古典語研究の方法として、すでに多くの人々が採用しているところである。しかし、その場合、結論として得られるところは、その原義やその原義からの意味の派生ないしは転成の事実であって、そこから昔の人々の心を解き明かしたり、文学作品の神髄をつきとめたりするところまでではつき進んでいないことが多い。それはそれでよいのであるが、文学研究や古典教育の立場からは、そこにいくばくかの不満が残るのも事実である。

清水文雄先生のご著書『衣通姫の流』は、そうした読者の不満をみげとに解消してくれよう。だれも知りつくしているかのごとく思っている語、たとえば「ものあはれをしる」「をかし」「はづ・はぢ・はづかし」「つれづれ」「はかなし」「世を知る」などの語をとりあげて、国語学的な意味での厳密な手続きをとりながら、そこから古典文学の神髄がみごとに解き明かされ、古代人の心が浮かび

あがらされてくる。いわば、国語学と国文学とのみごとな統一が、そこに実現されているのである。

さきに私は、とりあげられている語は、だれも知りつくしているかのごとく思っている語だと書いた。しかし、それらの語は、手あたりしだいにとりあげられているのでないことは言うまでもない。それはまさに古典を解き明かす鍵になる語であり、まさにキー・ワードなのである。そればかりではない。

そこには、清水文雄先生が一貫して求め続けてこられた日本人の心のありよう、詩心を解き明かす鍵があるという、先生の鋭い洞察力が働いている。と同時に、そこで解き明かされる詩心（ポエジー）は、先生の詩心をも語るものとなっている。これは、研究でありつつ、同時に評論でもあるということなのではないか。研究者としての先生と、詩人としての先生との統一が、ここにもみごとにみいだされるのである。

本書は、主部を占める九篇の論文と、「和泉式部ノート」として一括されている六篇の短章とから成っている。主部の九篇は、昭和三十七年から五十一年にかけて発表されたものであり、その中には本誌『国語教育研究』の第6・7・9号に発表された「『つれづれ』の源流」も含まれている。次に、その目を掲げてみよう。

衣通姫の流

源氏物語の男性論

「ものあはれをしる」ということをかし

はづ・はぢ・はづかし

「つれづれ」の源流

「あとなし」と「はかなし」

「世を知る」ということ

和泉式部ノート

文学的感想

岩つつじの歌

うきもあはれと

和泉式部集校訂余滴

男と女

中古文学の愛

読者は、どこから読み始めてもさしつかえないであろう。どこから読み始めたにして、つぎつぎに読みたくなって、結局は全部を読んでもしまふことになるにちがいない。本書はそういう本なのである。

試みに、本書の題名ともなった「衣通姫の流」の一部を引用させていただこう。「衣通姫の流れ」という言葉は、先生がずっと前から親しんでこられた言葉であり、先生にお教えをいただいた者にも懐しい言葉である。」

「允恭天皇と衣通姫との仲の隔絶は、現象的には、皇后の嫉妬をその要因とする。天皇と姫との別居という空間的隔絶は、皇后のほげしい嫉妬を避けるための消極的な措置であったが、もとより当事者二人の意志によるものであった。その結果、天皇の行幸のとがえがあったとしても、皇后の嫉妬という要因が排除されないかぎり、それはむしろ必然的なゆきといわねばならない。それにもかかわらず、二人の仲の時間的隔絶は、姫の心を不安に陥れ、『待つ恋』のなげきは、時とともに募ってゆく。そのとき姫は、たとえば、後の和泉式部が、『ともかくもいはばなべてになりぬべしねに泣きてこそみせまほしけれ』

と、時あつて偽装の狂態により自己放出を試みたような積極的な態度をとることはなく、かえって悲痛の情を内向させることによつて、『待つ恋』の純粹さに徹しようとした。このことは、姫が、空間的・時間的隔絶によつてもたらされる悲痛に堪えてゆく運命を、みずからに課したことを意味する。このような心がおのずから口をついて出た『我が背子が』の歌が、天皇の愛の燃焼を誘つたものといえよう。姫にとつて歌は、そのような人生を移調することのできる唯一絶対の器であつたのである。さきにいふ『衣通姫のなも』とは、このような文学の創造主体としての衣通姫を、統一的・特徴的にとらえるとき、かりに与えた名称である。」(一三ページ)

書紀の記述によつて、允恭天皇と衣通姫の悲恋物語をたどり、この物の核をなす四首の歌(その中に「我が夫子が来べき夕なりささがねの蜘蛛の行ひは夕著しも」がある)を解明したうえで結論づけられた「衣通姫のなも」のまとめの部分である。ここにいたるまでの解明の部分を省いた引用では、この引論文のおもしろさは伝わりにくい、この引用箇所だけでも、先生の探り求めておられる

詩心のありようの一端はうかがえるであろう。

歌は「はかなきこと」である。しかし、その「はかなき」歌が、人間にとってなぜ必要なのか、どういう意義をもつのかは、本書のいたるところで説きつくされている。平安時代の、一見華やかな外貌にもかかわらず、一人一人が深淵に臨むような孤独感を抱いて生きていた貴族社会で、人々は何によつて連帯をとりもどそうとしたのか、その中で歌はどういう意味をもっていたのか。この問いは、ある意味で今日の私たちの問いそのものであるといつてもよい。清水先生の胸底にも、同じ問いがあるように思えてならない。本書は、その問いに先生が自ら答えようと摸索し続けてこられた成果であり、それゆえにこそ、私たちに深い感動がわきおこるのだと、私には思えるのである。

本書には、高校古典教材にとりあげられることの多い作品も、数多くとりあげられている。古今和歌集仮名序、古事記の「黄泉の国」のくだり、つれづれ草、万葉集、伊勢物語(八十三段ほか)などがそれである。これらの教材を取り扱うときの教材研究に、

本書は直接的な参考文献ともなりうる。それほど直接的ではないにしても、教材を少し掘り下げてみようとするときには、本書はいつも有益な参考書となる。教材の読み深め方についても、具体的に教えられることが多い。そうした意味で、本書は古典教育の重要な参考文献の一つといつてよい。

また、本書には、あちこちで国語教育史研究への示唆がみられる。前近代の国語教育史については、まだほとんど未開拓といつてもさしつかえない状態であるが、本書に示唆されている方向での研究が進めば、国語教育はさらに根底から深められていくにちがいない。

先生の原著「王朝女流文学史」(古川書房刊)とともに、読者のご一読をおすすめしたい。(昭和53・9・25 古川書房刊 二四五ページ 一三〇〇円) (大槻和夫)